

平安文学語彙にみる「辺路」の周辺

西 耕 生

一、「はけ」という語

かつて柳田國男は、「八景坂」という地名をめぐって次のような見透しを書き記している。

大森停車場の上の八景坂はどう考えてみても八景一覽の地とは思われぬ。近年たびたびの土工などのためにやがて地形も不明になるうから、今の間にあの地名の何を意味するかを確かめておこう。自分の見るところでは八景坂の八景は単に上品な当字であって、ハッケまたはハケは東国一般に岡の端の部分を表示する普通名詞である。武蔵には特にこれから出た地名が多い。「……中略……」東北においてはハケよりもハッケの方が多かったと見えて、八慶または何八卦などという地名が少なくない。八景とあるのもいくらか見かける。ハケとハッケと別物でないことは、『茨城県方言集覧』に、

ハッケ 多賀地方にて崖のこと また他の地方にて山岡などの直
立せる崖

イワハケ 岩の傾きたる岨ま

とある。岨という標準語は普通水流に臨んだ高岸にのみ用いられるが、もし下が湿地平田等何であっても構わぬとすれば、ハケはまことにこれに相当している。尾濃以西の諸府県ではほこれと同じ地形をホキというのと、子音も共通であるからおそらくは本は一つの語であろう。アイヌ語の中に

も偶然かも知れぬが似た語がある。『地名辞書』続編に国後島の大八卦ほろばけ、一名ノポリパッケ、島中第一の高山なりと大槻氏『風土記』に見ゆとある。

『地名の研究』へちくま文庫版全集20(二五二―二五三頁)

「東国一般に岡の端の部分を表示する普通名詞である」ハケに対比して、『尾濃以西の諸府県ではほこれと同じ地形をホキというのと、子音も共通であるからおそらくは本は一つの語であろう』と言うのみならず、さらに「偶然かも知れぬが」と注意深く前置きした上で、ハケという語が或いはアイヌ語のパケと係わるかも知れぬと述べている。

以前「へち」という語を採りあげた筆者にとって、彼のこの洞察はすこぶる興味ふかい。本稿では、専ら海岸線を意味する「へち」といわば対比される古語「ほき」とその地勢に関わるいくつかの語を採りあげて、平安文学語彙にみる古語「へち」の位相を概観する。

二、「ほき」の周辺

現在も方言として用いられている山腹の嶮崖を意味する「ほき」という語の古い用例は、平安後期の勅撰和歌集に見出だすことができる。

水辺寒草といへることをよめる 大中臣公長朝臣

①高ねには雪ふりぬらし真柴川ほきの蔭草たるひすがれり

〔金葉和歌集巻第四・冬部・二七七〕

「真柴川」の岩陰に生えている草に氷柱が垂れ下がっているさまを見て、高嶺にはもう雪が降ったらしいと推測した趣の作である。結句の「垂氷すがれり」とは、草の生えている難所「ほき」との縁で用いられた語であろう。

この八代集における唯一例のほか、平安鎌倉時代の私家集には「ほきち」という用例をも含めて少なからず目にするができる。

② わきもこほきそのほきちにすまねどもなどあふ事のかたきしならん

〔六条修理大夫集・一七一〕

③ かた山のほきのさを田はうち返し春もやたごのみしぶつくらん

〔壬二集・一一九八〕

前者では、「木曾のほきち」を眼目に据えて「我妹子」に「逢ふ事の難き」とこと「片岸」すなわち断崖とを掛詞として詠みこみ、後者では万葉歌「衣手に水洗つくまで植ゑし田を引板吾が延へ守れる苦し」(巻第八・一六三四・或者)を下敷きとしながら、容易に耕せぬ狭く小さい田を「片山のほきの狭小田」と詠んでいる。万葉調のこれらは恋歌として詠まれているだろう。このような恋の道の「あやふさ」を、西行は次のごとく詠んでいる。

思ひきやかかる恋路に入りそめて避く方もなき歎きせんとは

④ あやふさに人目ぞつねによかれける岩のかど踏むほきの棧道

〔山家集下・雑(恋百十首)・一三三二〜一三三三〕

「避く方もなき歎き」をするほどの難しい「恋路」をよむ直前の歌の内容を響かせながら、④では「人目」を「常に」避けざるをえぬ困難な「恋路」を「岩のかど踏むほきの棧道」に見立てている。結句の「ほきのかけみち」とは、

磯道 文字集略云、磯道、へ士輦反、上聲之重、漢語抄云、夜末乃加介知、山路閣道也、

〔箋注倭名類聚抄卷三・五十一ウ。なおへ内は割注。〕

と和名抄に説くところから推せられるように、「山路閣道」すなわち山道の「険しいがけからがけへわたしたかけ橋」(新字源)という意から転じて「懸

崖のけわしい山道」をいう。今昔物語集にはこの「磯道」をカケヂと訓んだ例が見える。

一ノ谷ヲ渡ルニ艶又磯道有リ、屏風ヲ立タル如ク也。巖ノ高く峻キ下ニハ大ナル瀧有リ、下ニハ瀨有リ。下ヨリ逆サマニ涌キ上ル様ナル白波立テ、見渡セバ雲ノ浪・煙ノ浪、糸、深シ。実ニ、羽不生ズ龍ニ不乗ズハ不可渡ズ。

〔今昔物語集巻第五「一角仙人、被負女人、従山来王城語第四」〕

「屏風ヲ立タル如ク也」と形容される「艶又磯道」の峻しきは尋常でなく、「実ニ、羽不生ズ龍ニ不乗ズハ不可渡」ざる道なのであった。

因みに、「おおぼけこぼけ」と呼ばれる吉野川中流部の四国山地の峡谷には現在「大歩危小歩危」或いは「大崩壊小崩壊」などという字が充てられるけれども、この称呼もすでに、

「ぼけ」は「ほき」「はけ」と同意語で、断崖や急斜面を指すことばである。歩危は当て字である

〔角川日本地名大辞典 36 徳島県〕角川書店、一八九頁〕

ボケ(ホケ)はホキ、ハケと同義語で、断崖や急斜面をさし、「歩危」は当て字である。

〔日本歴史地名大系37『徳島県の地名』平凡社、三七六頁〕などと説かれているように、「ほき」を原とすると考えられるのである。

三、「かけみち」と「かけぢ」と

「かけみち」或いは「かけぢ」という語は、平安文学にも容易に見出すことができる。源氏物語宇治十帖に見える三例がいずれも八の宮の住まう宇治にかかわるといふ事実は、彼が「俗聖」であったことを強く印象づける。

橋姫巻の薫の口上と、椎本巻の大君の歌と、この二箇所、河海抄は次の引歌を指摘している。

世にふれば憂さこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ

〔古今和歌集卷第十八・雑下・九五・題しらず／よみ人しらず〕

源氏物語では、賢木巻にもこの上の句を引いた叙述が認められる。藤壺との逢瀬のち愛憎いりまじった感情に苛まれる源氏がいつそ出家してしまおうかと思ひ立つ場面である。

起き臥し、いみじかりける人（藤壺）の御心かなと、人わろく恋しう悲しきに、心魂もうせにけるにや、なやましうさへおぼさる。もの心ぼそく、なぞや、世に経ればうさこそまされとおぼしたつには、この女君（若紫）のいとらうたげにてあはれにうち頼みきこえたまへるをふり棄てむこと、いとかたし。

〔源氏物語・賢木〕

紫式部にはまた、古今集のこの歌を本歌とする「ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れたる庭につもる初雪」（紫式部集・一一三）という作が残されてもいる。古今集に収めるこの歌は、物語作者にとっても読者にとっても、吉野山への遁世の意志を示す作として容易に連想できるものであったろう。逸書とされる都良香『吉野山記』を「略記」したと明示する本朝神仙伝〔二〕には、役行者が「昔登富士山頂。後住吉野山。常遊葛木山。好其嶮岨。」と誌されるごとく、修験の行場としてその「嶮岨」は古くから著名であった。貴族が俗世を「ふり棄て」赴こうとする吉野山は、浜松中納言物語にも印象ふかく描かれている。

（中納言ハ）よしの山を心にかけ給へれど、よろつにまぎらはしき御身なれば、はるかなる山路、思まにもふりはへ給はぬ事をおぼしあまりて、八月十日よるのほどにおはす。道すがら、「あはれたれゆへ、かゝる知らぬ山路をたつねありくぞ」と、風のつてにも、いみじう知られたてまつらまほしう思つゞけ、いと物悲しう分け入り給へば、風のけしきも秋になりけり。……この度はいとようつくろひなされて、よのつねの人の心ぼそきすみかと見えたり。……いとどしき秋のゆふべ、かすかにきりわたりたるほど、いひしらずめでたう清らかにて、（尼君ノ住処ヲ

中納言ガ）立ち寄り給へるは、心まどひもせらるばかりぞ、見たてまつり給ける。

「鳥の音も聞えざりしに待たるゝはいつに習ひし人めなるらん
心ながらも、うちつけに怪しきままでにこそ」
との給も、いとあはれにおぼして、

み吉野の山のかげぢにいく千たび思をこする心きつらん
など聞え給て、今造り添へられたる廊におはしまして、うちやすみ給。

〔浜松中納言物語卷三〕

「鳥の音も聞え」ぬ「心ぼそきすみか」へ思いがけず訪れてくれた中納言に對して挨拶しようとして吉野尼君の詠んだ歌の心は、あたかも、山道に迷い訪れた沙門義春に對して「此処往古。人不来到。山中深山。谷中幽谷。鳥音猶希。何況人跡。」〔法華驗記卷上・第十一〕と驚き訊ねた「吉野奥山持経者某」の心に相通ずるかのごとくであろう。

四、「そはづたひ」の木曾路

さて、「かけぢ」は勿論、山岳地帯に広く見とめられる。ここでは特に「木曾のかけぢ」を採りあげて述べることとしたい。

山寺にこもりて侍ける時、心ある文を女のしばしばつかはしければ、
よみてつかはしける
空人法師

イをそろしや木曾の懸路かけぢの丸木橋ふみ見るたにおちぬべきかな

〔千載和歌集卷第十八・雑歌下・誹諧歌・一一九五〕

これは、女からしばしばよこされた「心ある文」のために女色戒を破ってしまふそうだと危ぶむ自らの心情を、法師が「文見るたにおちぬべきかな」即ち「踏み見るたにおちぬべきかな」に寄せて、いささか誇張して詠んだものである。

その原をたちて、みさかをすぐとて

ロよそにのみ聞きしみさかは白雲の上までのぼるかけぢなりけり

〔橋為仲朝臣集・一一八〕

また信濃の歌枕「園原」を発って「御坂」峠を過ぎる折に詠んだこの為仲の作は、続詞花和歌集の詞書（巻第十四・別・七一五）に従えば「陸奥国介」^{みちのくにのすけ}として任地に赴く途次のものである。「白雲の上まで昇るかけぢなりけり」とは、踏破に臨んだ「信濃の御坂」の実際の峻しさに驚いた、という詠みぶりであろう。「受領ハ倒ル所ニ土ヲ蹴メ」という言葉で有名な今昔物語集巻第廿八第三十八「信濃守藤原陳忠落人御坂語」もここに想い合せられよう。

同じ（法住寺殿にて院の）御供花の会、旅宿五月雨といふころそをハさみだれにきそのみ坂を越えわびてかけぢに柴の庵をぞさす

〔長秋詠藻・中・二三三〕

（羈旅）（前中納言隆房）

ニいざさらばかけぢにしばしいほりせんきそのみさかに夕日さしけり

〔正治初度百首・八八七〕

「木曾の御坂」と詠むこれらの二首では、「かけぢ」に「庵」を「さす」という詠みぶりが同じい。五月雨の所為で「御坂」を越え煩ってわざわざ「かけぢ」に庵を結んだのだと詠む俊成に対して、隆房の場合は、折りしも夕日が「射し」た光景を目にしたゆえに「かけぢ」にも拘らずしばし庵を結ぼう、と詠んだ趣であろう。

（羈旅）（尾張守親隆朝臣）

ホこまなづみ岩まかたそはたどり行くきそのかけ路はつららしにけり

〔久安百首・六九四〕

（秋）（沙弥生蓮）

へたどり行くきそのかけぢのほどばかりしばしははれよ秋の夕霧

〔正治初度百首・一七五一〕

これらに用いられる「たどり行く」という語からは「木曾のかけぢ」が岩肌を伝う難路であったこと、さらに駒も行き悩む難儀な地形であったことが、

あらためて確認される。

「木曾のかけぢ」がこのように多く詠まれてきたことは、近く、昭和四年から十年までに互って公にされた島崎藤村の小説『夜明け前』の書き出しを想い起こさせる。

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨^{そは}づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた。〔『夜明け前』序の章〕

木曾の「深い森林地帯」は文学の風景として近代に至るまで綿々と維持されてきた、と評してよいのであろう。藤村が綴る「岨^{そは}づたひ」その「そは」という語も、「ほき」と同じように、八代集にはただ一例しか見られない。

ト古畑のそはのたつ木にゐる鳩のともよぶ声のすぎき夕暮

〔新古今和歌集巻第十七・雑歌中・一六七六・題しらず／西行法師〕
ただ、先に引いたホにも「岩間片岨たどり行く」などとあったように、中世和歌には詠みこまれることの少なくない語であったかと思われる。

チあとたゆるあらちのやまのゆきごえにそはのつなでをひきぞわづらふ
〔万代和歌集巻第六・冬歌・一四七一・久安百首に／前参議親隆〕
りいとかけしそはのかはべのくち柳末ぞみどりに猶結びける

〔夫木和歌抄巻第三・春部三・柳・八二六・家集／鴨長明〕
これらに「そはの綱手」「そはの川辺」という表現が用いられているところから、「岨という標準語は普通水流に臨んだ高岸にのみ用いられる」と書き誌した柳田國男の言語感覚が中世にまで溯りうると推察して差し支えないのであろう。

五、「へち」の語志

次郎 真言師

次郎者、一生不犯之大驗者、三業相應之眞言師也。久修練行年深、持戒精進日積。……凡眞言之道究底、苦行之功拔傍。遂十安居、滿

一洛又一度々。通大峯葛木、踏邊地年々。熊野金峯・越中立山・伊豆走湯・根本中堂・伯耆大山・富士御峯・加賀白山・高野粉河・箕尾・葛河等之間、無競行挑驗。山臥修行者、昔雖役行者靜藏貴所、只一陀羅尼驗者也。今於衛門尉次郎禪師者、已智行具足之生佛也。

〈校異〉▽邊地—弘安本「礧邊路」。古抄本・陽明本「邊道」。

〔康永本新猿樂記・次郎条（東洋文庫本、二一六頁。なお日本思想大系本や現代思潮社版古典文庫本を参照して訓読を改めた箇所がある。）〕

「真言師」すなわち真言密教の加持祈禱をする修驗者のありようを述べる新猿樂記次郎条の一節である。二重傍線を施した箇所は、その直前の傍線箇所と対句をなして、修驗の苦行を述べる文脈を形成している。とりわけ所謂古本系に分類される弘安三年（一一八〇）古抄本に、「礧邊路」と「礧」字の附け加わった本文が校異として示されていることを慮れば、このような「礧」字の附け加わった本文においては、「大峯葛木」という山岳の行場に対して「邊地」と呼ばれる海辺の行場を対照しようとする意図が、「礧」字によって一層はつきり示されているものと理解されるであろう。

さて、破線を施したごとく、後文に「熊野金峯」をはじめとして山臥修行の地名を列挙していくことを視野に入れて、前文で「大峯葛木」と対照される「邊地」をも固有の地名として理解しようとする向きもあるうか。

「大峯葛木」については「聖の住所」（梁塵秘抄卷第二・僧歌・二九八）として真っ先に挙げられるような行場であったのに対し、「邊地」については、新猿樂記に「通大峯葛木踏邊地」と述べるところに特に留意すべき

かと思う。この「通」の字は、大きく修驗の靈地を列挙する後文に先立って、苦行の具体を対句として示すべく、「大峯葛木」から「邊地」へと到る実際の経路を念頭に置いて用いられた措辞かと推察される。さらに「礧邊路」と作る異文の存在をも顧れば、新猿樂記の「（礧）邊地」が、「へちと申し方」（桂宮本行尊大僧正集・九番詞書）と記されることのある「伊勢の礧のへち」（山家集卷下・雜・一四四一番詞書）を指している、ひとまずは理解してよかりそうである。

ところで、鎌倉時代初期の成立かと目される諸山縁起に「役行者熊野山參詣日記」として始まる記事があり、そこには次のような一節が見える。

……行前隱神、……熊野御山參詣次、業消水也、即云隱了、行前塩屋在辺路宿也、夜宿人大魚米為食之、行者以印身莊、……大魚隨風遠亡畢、故被勅仕立了、切目中山谷口莊面、亦女值、見凶形也、……

〔九条家本諸山縁起「伏見宮家九条家旧蔵 諸寺縁起集」
〈圖書寮叢刊〉一二九頁〕

二重傍線を施した箇所を日本思想大系本『寺社縁起』で「行く前の塩屋の在辺の路に宿るに」と訓じているのは恐らく底本に施された「行前塩屋在辺路宿也」という傍訓を参看した結果なのだろうけれど、本稿の立場からすれば、ここは「行く前ノ塩屋ニ在ル辺路ニ宿スルニ」のごとく訓すべきところではないかと考える。

「塩屋」とは、後文に「切目中山谷」という地名が見えるところから、熊野への参詣路の途中にある九十九王子社の一つ、切目中山王子へ赴く手前に位置して、和歌山県御坊市北塩屋に現存する塩屋王子を指しているであろう。

白川院熊野へまうでさせ給ひける御ともに侍りて、しほやの明神の
おまへにて人々歌よみけるに
よみ侍りける
徳大寺左大臣

立ちのぼるしほやの煙うらかぜになびくを神の心ともがな

後三条内大臣

おもふことくみてかなふる神なればしほやに跡をたるるなりけり

〔統詞花和歌集卷第八・神祇・三七四～三七五〕

白河法皇の熊野詣に随行した折「塩屋の王子」（千載和歌集・一二五八番
詞書／新古今和歌集・一九〇九番詞書）で「同時」（歌枕名寄・八六六八番
左注）に詠ぜられたかと目されるこの二首のほか、「紀伊国」の歌枕として
歌枕名寄には「塩屋の里」の一例も掲げている。

里

中務卿親王

こととはむ塩屋の里にすむあまも我がごとからきものやおもふと

〔歌枕名寄卷第三十三・南海部 紀伊国・塩屋浦・八六六九〕

いずれも「塩屋」という名に因んで、「煙」「汲む」「垂る」「海人」「辛し」といった「塩」の縁語が用いられている。海辺に臨んだ塩屋王子のあたりに
は「辺路」と呼ばれる場所が存したのちがいない。法皇一行の宿が「塩屋
の王子」に宮まれたのかどうかはともかく、諸山縁起に記される役行者の
「塩屋在辺路宿」は「塩屋」にある「辺路」に設けられた「宿」だと解釈す
べきではあるまいか。

熊野に詣で侍しついでに、切目宿にて、海辺眺望といへる心を、

をのこどもつかうまつりに

貝親

ながめよと思はでもや帰るらん月まつ浪の海人の釣舟

〔新古今和歌集卷第十六・雑歌上・一五五九〕

塩屋王子の先「切目宿にて、海辺眺望」という歌題を詠んだ作などをもこ
こに想い合せれば、いわゆる大辺路・中辺路に入る以前の「紀路」において
も紀伊水道から太平洋を臨む「辺路」と称せられる場所が存在したことは、
容易に推察されるであらう。

こうして同時代における「四國邊地」（今昔物語集卷三十一第十四）、「四
國邊」（南无阿彌陀佛作善集）、「しこくのへち」（梁塵秘抄卷一・三〇一）、
また後代の「大峰邊地」（古今著聞集卷二・五二）、「四州海岸九州邊路」（足
摺岬金剛福寺・不動明王画像・道興自筆墨書）といった称呼の存在なども
視野に収めるなら、「邊地」「邊」「邊路」などと表記される「へち」は伊勢・

紀州のみならず四国・九州などの海岸線ひいては大峰山脈に見られる水流に
面した嶮崖をも意味する語であったと理解する方が、むしろ穏やかであろう。
それは「ほき」や「ほきぢ」が本朝のさまざまな山岳地帯に見られること、
そして、ホキの異形だと考えられるホケやハケが地名として各地に残ってい
ることと軌を一にするであろう。

新猿楽記に見える「邊地」はしたがって、「大峯葛木」を通じて踏むこと
のできる水流あるいは海岸線に臨んだ嶮崖、即ち「大峰邊地」や「伊勢の磯
のへち」或いは「塩屋在辺路」など抖擻の地を包括して述べようとした用語
であるという考えに想い到るのである。

注

- (1) 拙稿「四国辺地」覚書―和語「へち」の周辺―（『愛媛国文研究』
第五十二号、愛媛国語国文学会、二〇〇二年十二月）。「仏法の名を
だに聞かぬ遠き島」四国―西行白峯訪陵説話と「四国の辺路」―（『愛
媛国文研究』第五十三号、愛媛国語国文学会、二〇〇三年十二月）参照。
- (2) 小学館版『日本国語大辞典 第二版』第十二巻を参照。
- (3) 『南无阿彌陀佛作善集』はその複製に検する限り、傍訓が「へち」
あること明らかである。なお、大日本史料所引本文には傍訓を「フチ」
と翻読して「四国邊」という本文を載せているので、その取扱いは注
意を要する。
- (4) 元禄三年板本を底本とする新訂増補國史大系本第十九卷三七頁頭注に
は「地、據靜本谷本補」と注しており、「大峰邊」と作る本文が存した
ことも知られる。
- (5) 近藤嘉博『四國遍路』桜楓社（昭和四十六年）一二九頁。

（にし・こうせい／愛媛大学法文学部助教授）